魚と水　Uo to Mizu (44)： 1- 3, 2008

「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業とその後について
～尻別川の流域環境保全に向けて～

木村　篤（後志支庁産業振興部長）

はじめに

尻別川はフレ岳（1,048m）に源流を発し、羊蹄山麓を経て日本海へと注ぐ、流路延長 126 km、流域面積 1,640 km^{2}の後志地域最大の河川です。何度も「清流日本一」に選ばれているだけでなく、水産、農業、発電、釣り、アウトドアスポーツなど極めて多面的な利用がなされており、地域経済の面からも大変重要な河川です。

尻別川にはヤマベ（サクラマス）、アユ、ヤツメウナギなど多くの魚種が生息し、古くから地域の水産業を支えるとともに、道内屈指の釣り場として親しまれてきました。イトウの生息南限としても知られていますが、現在では尻別川のイトウは絶滅寸前の状態です。河川環境を改善し、イトウをはじめとする在来種の個体群を回復し、河川生態系を保全することが急務の課題と言えます。一方で、最近全国的に問題となっている外来魚ブラウントラウトの生息が尻別川でも確認され、水系内での分布域の拡大が懸念される状況です。

このようななか、後志支庁では平成 17～18 年度の 2 ヵ年にわたり、「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業を行いました。本事業は尻別川の魚の生息実態を釣り人からの情報で把握しようと試みたユニークなもので、2 年間で集まった 436 の情報から本流、支流の魚類生息状況が概括的に把握されました。

この事業は、関係者による最初の連絡会議では、ブラウントラウトを駆除するための取り組みと誤解され、つり雑誌でも取り上げられましたが、「在来種の生息環境を保全創出し、在来種を保護育成することによって外来魚の分布拡大を抑制する」という当初からの考え方を明確に示すことで多くの関係者の理解を得、事業を推進することができました。

図１．羊蹄山麓を流れる尻別川

本事業の 2 年目には、河川環境改善の要となる河川横断工作物の実態と工作物の上下流での魚類の生息状況についても、各河川管理部局や道立水産孵化場の参加を得て実施することができました。このように改善に向けた具体的な取り組みにも着手できたことは、事業をイベント的に終わらせないということで大きな成果であり、河川管理者と水産孵化場の共同参加に深く感謝するとともに、今後の取り組みの継続をお願いするものです。

この後の別項で、呼びかけ事業で取り組み、多くの釣り人にご協力いただいたアンケート調査、河川工作物と魚類の生息状況の調査結果を紹介しますが、本稿ではそれに先だって、尻別川の開拓後の変貌を概括し、それに対する取り組み、そして今後について少し思いを馳せてみたいと思います。

尻別川の変貌

今から 150 年前、松浦武四郎の頃の尻別川は、河口に和人とアイヌの人たちが住んでいるだけで、原生林の中を蛇行しながら豊かに流れ、アイヌの人たちが秋になるとサケを獲るために漁場に通って来ているだけでした。きれいな水の中を、イトウを頂点としてサケ、マス、ヤツメなどが、上流から下流まで自由に泳ぎ回っていました。明治の中期以降、開拓が進むにつれて洪水に悩まされるようになりましたが、地域にはまだ尻別川を改変する力はなく、全く原始河川のままでした。

尻別川にとって最初の大きな変貌は水力発電所の建設でした。大正 10 年頃から 35 年ほどの間に、蘭越町から京極町まで、本流に 6 カ所、真狩川に 1 カ所の発電用取水ダムが造られたのです。昭和 26 年に蘭越ダムができてからは、魚たちは、蘭越町から上流の町村には遡上できなくなってしまいました。これと同時に、発電用取水によって、ダム直下から発電後の放流地点

まで大きく減水したことも大きな問題でした。ダム建設は大きな出来事でしたが、しかし、それでもダムを除けば河川はほとんど原始のままであり、豊かな河畔林に囲まれ、瀬と淵をつくりながら昔のままで流れていました。人々の生活はますます川沿いに進出し、集落や水田は洪水の脅威にさらされていましたが、地域社会にはまだ川を大きくいじる土木技術も力もありませんでした。

現在につながる本格的な河川改修は、発電用ダムの建設が一段落した昭和30年代に始まります。開発局は、昭和 32 年に蘭越町から下流の直轄管理区間で本格的に治水事業に着手し、昭和40年代からは土木現業所も中上流部の改修に着手しました。事業の目的は洪水の防止であり、蛇行した川を直線化し堤防を築くことが中心となりました。曲がりくねった川は直線化することで短く、急勾配となり流れやすくなりました。下流部では川底の浚渫も行われましたが、それまでは、蘭越町初田のあたりでも川の中州まで歩いてわたれたということです。改修は次第に支流でも行われるようになりましたが、急流が多い支流部では、幾重にも落差工、床固め工、砂防ダムが造られ、さらに上流には治山ダムが造られました。頭首工などの農業用水施設も盛んに造られましたが、5 月から 8 月一杯までの用水期間中は、発電用取水と同じように支流の水も激減するようになりました。

事業の結果、地域社会は洪水の危険から大きく解放され、農業生産も向上しましたが、ダム設置以降 80 年余りの様々な工事で、尻別川の魚類の生息域は著しく狭められました。本流・支流のダムや横断工作物によって、上下流への移動ができなくなった区間は数知れません。その結果として、特に、サケ、マス、ヤツメなど上下流を往来し尻別川を大きく生息域としていた魚が大きな影響を受けたと言えます。以前は喜茂別など上流部まで上がっていたサケやサクラマスがダムによって遡上できなくなり、また、かつては石狩川と生産量を競ったヤツメも、尻別川が南限と言われるイトウも激減しました。

これまでの魚類の生息環境改善の動き

以上のような尻別川の改変は、電気供給、洪水防止、農業振興など、その時々、地域社会からの要望で進められてきました。地域の多くの人々にとっては魚のことは気にかかりながらも、優先的な課題にはなってこなかったのです。魚道が設置された河川横断構造物もありましたが、次々と河川施設が造られた昭和40年代の後半から50年代には、設置はごく一部にとどまりました。現在、尻別川には把握できただけでも300カ所以上の河川横断施設がありますが、古い施設ほど魚道がついていない状況です。近年は、人々の環境意識の高まりと、何よりも漁業者の強い要望のなか、魚道付置が当たり前になってきました。既設施設にも付置されるようになってきており、本流の発電用ダム 6 カ所についても 10 年ほど前に相継いで設置され、その効果が現れてきています。

河川の水質汚濁についても、昭和40年代の後半からは、河川工事や農地造成、ゴルフ場などの造成による河川汚濁や、工場排水、生活排水、農薬・肥料、家畜糞尿などの河川流入のよる水質悪化が、道内各地で問題になりました。尻別川においても漁業者が声を上げ、工事などでの河川汚濁に対して、「尻別川環境保全対策協議会」を設置（平成 3 年）し、水質改善の取り組みを開発事業者に求めるようになりました。やはり川に対してものを申す最も力強い主体は、一番下流で被害を受ける漁業関係者ということになるのかもしれません。近年は下水道整備、家畜糞尿対策なども進み、尻別川でも水質は改善しつつありますが、現在も、漁業者による監視は続けられています。

期待したい近年の新たな動き

そして、ここに来て近年の注目すべき動きを三つあげたいと思います。

一つは絶滅寸前と言われている尻別川固有のイトウ（オビラメ）の回復を目指す動きです。イトウの釣り師、河川技術者、学者、ジャーナリストなどで作る「尻別川の未来を考えるオビラメの会」（平成 8 年設立）は、平成 13 年に「オビラメ復活 30 年計画」を作り、平成 16 年には人工孵化した稚魚を支流倶登山川に放流し、放流域の生息環境改善にも取り組んできています。平成 18 年には、当支庁に対し倶登山川落差工への魚道設置要望、今年になって小樽土木現業所に河川整備計画での配慮を求めるなどの提案も活発に行っています。また、尻別川の魚類の頂点に位置するイトウが生長していくことができるような河川生態系の確立という、治水、利水とは違う、環境の面から新たな取り組みと言えます。是非イトウの復活を実現させ、尻別川において生物多様性を守りたいものであり、当支庁としても、今秋にも一基目の魚道を造る予定です。

二つ目は尻別川の河畔林伐採に対するアウトドア体験事業者の動きです。これまで、地域では尻別川の河畔林などの景観に経済的価値を見いだしてきませんでしたが、10 年ほど前からカヌー・ラフティング事業が尻別川で行われるようになり、今では年間 8 万人もの

利用者があるといわれ、河畔林に囲まれた清流でアウトドア体験を楽しんでいます。このような状況の中で、昨年、小樽土木現業所がラフティング区間の河畔林の伐採工事を発注しましたが、伐採予定木に付けられたリボンテープを不審に思った体験事業者がすぐさま反応し、土木現業所に説明を求め伐採に異議を唱えたのです。新聞でも大きく報道されたのでご存じの方も多いと思います。結果として工事は一時中止され、現在、川づくりのあり方を巡って関係者による話し合いが行われています。尻別川にとってこれまでにない新たな経済主体の登場と言えます。彼らは新参者ですが、日常的に尻別川に入り、日々河川環境に触れています。カヌー・ラフティングのための良好な河川環境は、今でも地域観光発展のための欠かせない資源であり、今後ますます必要とされてくると思われます。

そして三つ目がサクラマスの天然産卵の拡大を目指す動きです。ほとんどの資源を人工孵化に依存しているサケと違って、サクラマスは天然産卵による資源の割合が高いと言われています。おりしも、後志の沿岸は磯焼けが進み、漁獲も低迷し、これといった打開策が見いだせない状況です。そのような中にあって、春先の重要魚種であるサクラマスの天然産卵の拡大は、漁獲増につながる実現可能性のある試みと言えます。尻別川は孵化放流の重要河川でもあり、支流目名川では毎年約 1,000 尾の親魚を捕獲し採卵を行っていますが、支流昆布川などでそれとは別に相当数の天然産卵も行われおり、これが流域全体に及ぶことになれば人工孵化放流を遙かにしのぐ規模となります。

サクラマスの天然産卵区域の拡大の要をなすのは親魚の遡上、幼魚の降海環境の改善であり、魚道設置など河川横断工作物の改善です。サクラマスはサケと違って長期間淡水域で生育することから、尻別川の生態系の維持回復上で指標となりうる魚種ですが、これが、水産業の振興として真正面から取り上げられることになれば、これまでにない力強い動きであり、流域全体の魚類生息環境改善が大きく進むことが期待さます。

以上、三つを新たな動きとして紹介しましたが、見た目上は、それぞれ環境、レクリエーション、漁業と別々のものを目指しています。オビラメは崇高な理念を持っていますがラフティングやサクラマスのような分かりやすい経済性を持っていません。ラフティングもオビラメも尻別川の一定区間の動きですがサクラマスは全体をカバーしています。しかし、河川環境の改善というベクトルは同じ方向を向いており、このような動きが協同していくことが、治水、利水とも相まみえながら、環境改善の具体的な成果を上げていく鍵になると思っています。

おわりに

以上見てきたように、「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業を実施したこの時期は、治水、利水だけでなく環境や景観もということが、百花総覧のように尻別川に求められてきた時期です。実に多くの人たちが流域環境改善に関わり、あるいは関わろうとしていますが、連携の軸が必要です。羊蹄山麓7町村は平成12年に「尻別川連絡協議会」、平成 17 年には「羊蹄山麓広域景観づくり推進協議会」を設立し、平成 18 年には全道で初めて広域景観づくり推進地域の指定を受けるとともに、尻別川の河川環境を守る統一条例を 7 町村で制定しました。これら行政の連携を民間レベルでつないでいるのが NPO 法人尻別リバーネットであり、河畔林伐採問題後の尻別川のあり方を巡る意見交換の軸になっています。

当支庁としても。「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業は平成 18 年度で終了しましたが、「羊蹄山麓広域景観づくり指針」の「水辺景観部会」において本事業の主旨と成果を生かし、引き続き流域町村や漁業者をはじめ多くの関係者と協同で、尻別川の流域環境と景観の保全に向けた取り組みを継続していきたいと考えています。

最後に、上記広域景観づくり指針において述べている水辺景観づくりの考え方を紹介します。「①水質の向上、河畔林の保全、回遊路の確保といった魚類の生息環境改善などにより、尻別川とその支流が持つ固有の生態系の保全・回復とともに、緑豊かな水辺景観づくりを進めます。②釣り、ラフティング、カヌーなど多くの河川利用者が、共に良好な水辺景観を楽しむことができるよう、ゴミを捨てない、水を汚さないなどのマナー普及を図るとともに、尻別川利用についてのルールづくりを進めます。」

（きむら　あつし：後志支庁産業振興部長）